

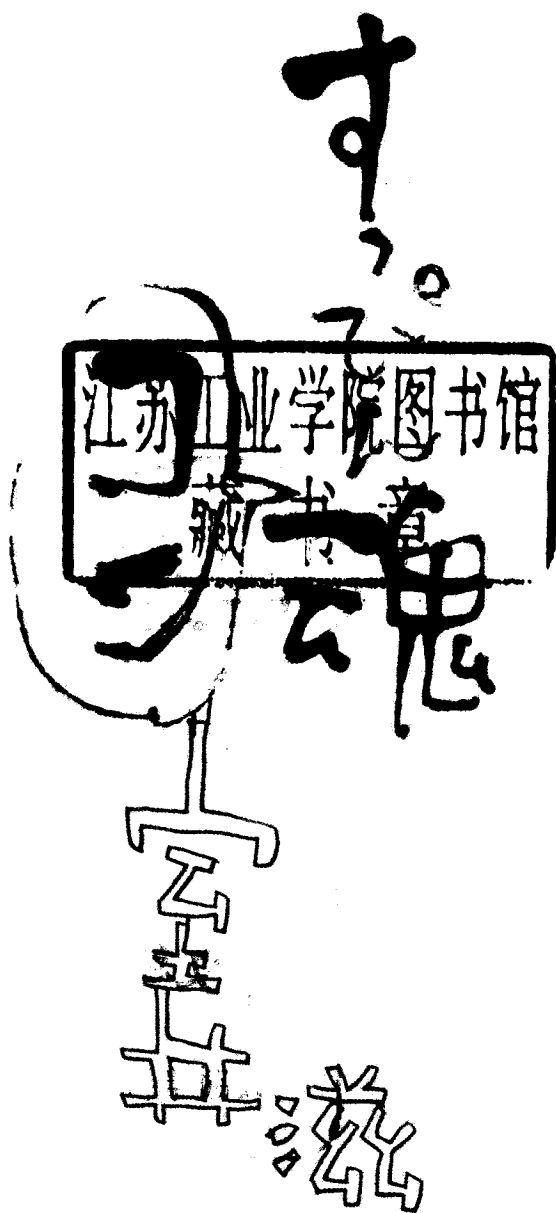
コニ  
す、ひん  
コニ  
す、ひん  
コニ  
す、ひん  
コニ

石地  
宝真滋

१.  $\frac{1}{x^2} = x^{-2}$  २.  $\frac{1}{x^3} = x^{-3}$  ३.  $\frac{1}{x^4} = x^{-4}$  ४.  $\frac{1}{x^5} = x^{-5}$

[illegible]

シ  
ン  
ト  
シ



### 著者略歴

富山県出身。早稲田大学社会科学部在籍中から自主映画の女王として活躍。大学中退後、女優に。

著書に『まんぷく劇場』（文藝春秋刊）『むかつくぜ!』『キトキトの魚』『東京バカッ花』（いずれもマガジンハウス刊）がある。

特技：釣り（一級小型船舶免許取得）、麻雀、囲碁  
好きなもの：自転車、食べられる実のなる木

---

---

## すっぴん魂<sup>コン</sup>

1997年9月10日 第1刷

定価はカバーに表示してあります

---

著 者 室井 滋  
発行者 藤沢 隆志  
発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 千102  
電話 03(3265)1211(代)

印刷所 凸版印刷株式会社  
製本所 加藤製本株式会社

---

© Shigeru Muroi 1997  
ISBN4-16-353240-4

Printed in Japan

万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。  
小社営業部宛お送り下さい。

すっぴん魂   
目次

ミニスカポリスはいかしてる

肝つぶれ

かくし味

蟹気楼証明書

春ボケ

バンダナの少女

ボロは着てても心は錦

私のお盆

あま手

役者の待ち時間

虫づくし

近頃のガキ

腐ってからじゃ遅いのよ

きらりカラス

ガンバレ猿岩石！ 猿岩石編①

トルコ風呂でバイト 猿岩石編②

ハッサンの性感帯 猿岩石編③

ああ、風の盆

124 117 110 103 96 89 82 76 69 62 55 48 41 35 28 21 13 7

エスパー・エツオの力 その①

エスパー・エツオの力 その②

『シオンの娘』にて

宝の山だす

納豆五百円なり

『ピ』の御縁

びつくり便所

黄色いドレス

チューは大切に！

ああ、せちがらい

彼女ん家のストーカー

盛岡チャレンジ隊 盛岡篇①

わんこ一騎討ち 盛岡篇②

死守！冷麺ナリ 盛岡篇③

ほどほどにしたもれ

行き倒れの人

あとがき……のようなもの

執 横 日比野寛彦

本文イラストレーション 長谷川義史

帯・目次デザイン 鶴丈二

すっぴん魂





## ミニスカポリスはいかしてる

ミニスカポリスはいかしてる

三週間前の週末の午後。私は、思いがけずド渋滞にはまった。  
渋谷に向う明治通り。

信号が変わっても、ニッチもサッチも動かない。車、車、車！

苛つくせいか、蒸し暑く思えて、息抜きに窓を開けたところ、外から、おじさんの怒鳴り声が聞こえてきた。

「何や、ほんの十分……十分やでえ、車止めたん。タバコ買いに出ただけでこんな、かなわんわ！」

下っ腹から吐き捨てるような、その野太い声に、ただの通りすがりの私も、思わず身が縮んだ。

どうやら、路上駐車していた車を、レッカー移動されてしまったらしい。

ところが、白いチョークで、駐禁にて移動済のお知らせを、アスファルトに書き込んでいた若い婦警さんは、この手の怒鳴りには慣れているらしく、全く動じない。

まるで、何も聞こえていないかのように、黙々と自分の任務を遂行していた。

「何やアンタ、持ち主が目の前に来てるんやから、ワシの目エゝ見て話さんかい。だいたい、この後ろの車、ワシが止める前からあつたんや。何でこの車は助かつとるんや？」

エキサイトするおじさんに向って、婦警さんは、ゆっくり頭かぶりを上げると、一回大きく溜息をついてから、口を開いた。

「順番ですから……じきにこっちのも」

片手を腰にあて、束ねた髪の前髪をいじりながら、彼女はボソツと言った。

すると、この態度に益々むかついたのであろうか……おじさんは、決して言っていない事を口走ってしまったのだ。

「オ、そう言うたなワレ、順番やてえ!? 順番ならワシの方が後に止めたんや。婦警のくせに、そんなツケマツ毛付けて、チャラチャラしよるから、何も見えへんのやろ。そんな分厚い化粧してる暇があるんなら、ちゃんと仕事せんかい！」

相変わらず動けぬ車の窓から、私は思わず身をのり出して、婦警さんの顔をまじまじと見た。

た……た……確かに、目にはクルンとツケマツ毛、……ノーズシャドウばっちりのピンのルージュくつきり……派手と言われりゃあ、激しい程にビビッドなメイクではあった。

ドラマで婦警役をやった時の事を私は反射的に思い出したが……そういえば、メイクさんより、くれぐれもメイクは控え目になって言われたっけ……。

しかし、果たして、婦警さんが派手なメイクしちゃあいけないなんて規則あるんだろ  
うか？

「今時、看護婦さんだって、茶パツだったりするからなあ……」

緊張が走る二人を、横から、すっかり盗み見して、私は無責任に呟いたりしていた。  
が、その内、何を思ったか、婦警さんが大きく動いた。

例のチョークで、立っているおじさんの周りをグルリ一周して、円を描き、さらにその円から矢印を引いて、その矢印の向うに大きなバツテンを描いたのだ。

おじさんの方は、呪いをかけられたみたいに、その間、微動だにできず、キョトンと

していた。

おまけに、この一連の行為の仕上げに、婦警さんから、やけにさわやかな笑顔まで贈られたものだから、おじさんはすっかり戦意を失くしたようで、ヘナヘナとしょぼくれてしまった。

明治通りで、あんな大きなバツテンを描く人なんて見たことない。

私は、すっかり呆氣にとられてしまった。

が、残念ながら丁度この時、おいしいタイミングで渋滞の列は動き出してしまったのだ。った。

さて、ことの次第を見届ける事ができなかったせいだろうか。

この婦警さんの印象は、私の中にとっても強烈に残ってしまった。

その後、町で見かける婦警さんは、皆、あまりにも地味なため、「ひょっとして、あれは、テレビ東京の『出動！ ミニスカポリス』のロケじゃあなかったのか」などと、あの目撃した光景を疑ったりもしたが……。

しかし、先日、ミニスカポリスのような浮世離れた婦警さんに、私は再び、お目に

かかれるチャンスに恵まれたのだ。

友達のA子が運転する乗用車に乗って、買い物に行こうと、山手通りを走っている時だ。

突然、ミニバトの婦警さんにマイクで呼び止められた。

A子がシートベルトをし忘れていたのだ。

「お止めたのは、シートベルトを着用されていないからです。はい、免許証、拝見！」  
見上げれば、何と、ミニスカポリスばりのド派手マイクの婦警さんだ。

A子も、その尋常じゃない厚化粧にはすぐに気付き、「何、この女……濃すぎる」という白い眼をまともに向けてしまった。しかもおまけに、婦警さんに向かって出したものといったら、免許証ではなく、とんでもないセリフなのであった。

「困っちゃうく、私、妊婦なんですう！」

勿論、嘘だ。

妊婦だと、シートベルト着用の義務づけがゆるくなると知っての嘘。

だって、たった今までA子は、恋人ができないと、私にばやいていたのだから。

さて、ミニスカポリスの反応だが……。

彼女は、「ああ、妊婦さんねえ」とシレッとつぶやくと、しらけた顔で、A子に一瞥を送った。

あきらかに嘘を見抜いている顔だった。

「母子手帳拝見！　なんてきたら、どうするんだろう？」

私は内心ヒヤヒヤしながら、ミニスカポリスのアイラインのカーブを目でなぞった。  
ところが、どうだ。

「今、気分がすぐれないのなら、シートベルトは結構よ。でも、ほらそのタバコ、妊娠中のタバコは即刻やめなきゃね」

ミニスカポリスは、A子の目を見てキッパリと言つてのけたのだ。

さすがはミニスカポリス。人目を気にせず、堂々とスーパ―モデルメイクをやっているだけの事はある。

『その言いわけ、一ぺんだけ大目に見るけど、次は無いよ』

彼女が言葉の裏に含めた意味は、ビンビン私達に伝わり、慌ててタバコをもみ消したA子は、即座にシートベルトを締めて目を伏せた。

## 肝つぶれ

早朝、大阪に向う東海道新幹線の中でのこと。

午前十時から収録するドラマの大阪弁の方言指導テープを、繰り返し繰り返し聞きながら、私は一人ぶつぶつセリフの練習をしていた。

と、突然。すぐ後ろの席から、

「ウドリヤゝゝうるせえ！ 変な大阪弁でブツブツ。何言うてけつかんねん!？」

と怒鳴られてしまった。

お客がガラガラで静かだったせいだろう。独り言みたいな程度に声量を落としているつもりだったが、それでも、すぐ後ろには耳障りだったらしい。

「すいません。煩<sup>うるさ</sup>かったですか？」

と、思わず立ち上がってあやまると、

「まだ早いんや。ワレのせいで眠れんやないか。いいかげんにせい」

と、再び叱られてしまった。

パンチパーマの山椒魚が背広をひっかけてるみたいな感じのおじさん。

す、す、すごく恐い。私は、

「ヤクザかもしれない。ウドリヤゝって、オンドリヤゝの事かなあ!? 大阪弁って迫力あるなあゝ」

などと、青ざめながら考え、その後コソコソデッキに行って大阪弁の練習をした。

それから、さらに三日後。またしても新幹線の中。今度は土曜の午後二時位で、車内はけっこう満員。おばちゃん達のグループや、家族連れ、単身赴任の週末帰省組と、にぎやかだった。

私は東京を出発したら、すぐにロケ現場に電話しろと言われていたのだが、生憎車内電話がふさがっている。デッキに出て自分の携帯電話を使ったが、デッキはガタンゴトン、ゴー、ピーという騒音がすさまじく、まるつきり相手の声が聞こえない。で、仕方なく、自分の席に戻って、こっそり携帯を使ったところ、ほんの二言三言小声で喋るや否や、すぐにチェックが入ってしまった。